ホスト社会沖縄と南米系日系人（1）

―文化資本に基づくネットワーキングとその継承―

琉球大学　鈴木規之

1　目的

本研究の目的は、2001 年より研究を継続している「沖縄社会に内包されるディアスポラ」の中から「南米系日系人」に的を絞って、彼らがホスト社会とどのような関係を築いているのかを分析することにある。沖縄社会は多文化化が進行しているにもかかわらず、異文化を持った人々がそのハビトゥスを表出しにくいのが現状であるが（安藤・鈴木・野入、2007）、日系人は結束的な（＝異なるハビトゥスを許容しにくい）沖縄社会に入り込める資源（ルーツの共有）を持っている。「世界のウチナーンチュ大会」などで県を挙げて移民の歴史を表彰している沖縄において、彼らがどのような文化戦略を用いてホスト社会での認知を得ているのかを、文化資本に基づくネットワーキングやその継承についての分析を通して明らかにすることを目指している。

2　方法

調査の期間は 2015 年 8-10 月、本人が南米からの移動経験を持ち、沖縄県内で社会人として生活しており沖縄社会と出身国社会をつなぐ立ち位置にある南米系日系人を対象に調査を行った。サンプリング方法は琉球大学でスペイン語のクラスを担当している南米系日系人の講師 2 人（日系ペルー人、日系アルゼンチン人）および県内でサルサ教室を主宰するダンス講師（日系ペルー人）を起点としたスノーボールサンプリングである。対象者の人数は合計 26 人（内訳：ペルー出身者 18 人、アルゼンチン出身者 7 人、ブラジル出身者 1 人）であった。

3　結果

聞き取り調査の内容は、①本人属性、②移動歴、③ネットワーク、④家族、⑤教育、⑥職業、⑦遊び、⑧観光との関わりについての 8 項目である。田巻松雄らの越境する（日系）ペルー人の研究（田巻・スエヨシ、2015）の対象者が出稼ぎを目的として来日している（およびその子供達）であるのに対して、沖縄に在住する日系人は仏壇や位牌の継承や親族の呼び寄せ、県系人子弟を対象とした留学を契機とした場合が多く、最初からある程度定住を視野に入れている人が多いことが沖縄の日系人の特徴と言える。①について目立った傾向としては、半数程度が日本国籍を取得していること、専門職や管理職、事務・営業的職種の者が多いこと、大多数が日本語を習得していることが挙げられる。

4　結論

本調査での対象者は、日本とりわけ沖縄在住歴が長く、沖縄社会に根を下ろしているといえよう。自らのルーツへの関心を契機として成人後に移住してきたケースが多く、移住直後は沖縄の親族が定着をサポートしているが、その後は親族関係に留まらず仕事や育児・遊びを通して幅広いネットワークを築き、最近では SNS を用いて架橋的な役割を果たしていること、文化資本の継承については公的な側面では困難であるが、私的な部分で日系人としての意識づけがなされていることが明らかになった。

文献：安藤由美・鈴木規之・野入直美編，2007，『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン―新たな出会いとつながりをめざして―』クバプロ.
田巻松雄，スエヨシ・アナ編，2015，『越境するペルー人：外国人労働者、日本で成長した若者、「帰国」した子どもたち』下野新聞社.